

5弁以外の花もある



◆西山 豊 (大阪)

ここ2～3週間、児童書の『植物の図鑑』をもっていそいそとパソコンに向かう私の姿を見て、「ブーメランのつぎは何ですか」と女房が冷やかしながら問いかける。そこで、いま重大な研究をしている、これがわかればノーベル賞は間違いない、という。ちょっと興味ありげなので、植物の中には5という数がひそんでいる、花卉の数は5が多い、と説明する。

サクラやウメ、それにキキョウも5枚だ。シクラメンもパンジーも5枚だけ。知らなかっただろう。冬の花、ツバキやサザンカも5枚だ。花卉には5枚が意外と多いのだ。もしかして5枚が一番多いのではないか、5枚が一番安定した花卉の数ではないか、と思うのだ。

昨日庭の手入れをしたキョウチクトウも5弁である。今晚のおかずのオクラも星形で五角形をしていた。このあいだ視たテレビ番組、たけしの「万物創世紀」で紹介されていたスマトラ島の世界最大の臭い花、ラフレシアも5弁であった。このように植物の中には、5という数字がひそんでいるのだ、とだんだん熱が入ってくる。

そんなことはない。庭に植えてある我が家の草や木の花弁は、5枚以外がいくらでもある。ただ5の花を集めただけに過ぎないのだ、と私の頭を冷やすかのよう、女房が反論する。

日本を代表するキクの花、これは花卉の数が無数にあり、多弁である。バラやツバキ、ボタンやカーネーション、これも八重に咲いていて、花卉は5枚という具合に単純ではない。確かにそうだ、キクの多弁、ボタンの八重咲きはいったん議論からはずそう。花卉が3枚、4枚といったように、枚数がわかりやすい花についてだけ考えてみよう、と私は提案する。

了解、それでも5枚が多いと決めつけるのは、まずいのじゃない？

いま庭に咲いている白いカラーの花は1枚である(図1)。アヤメは3枚だし(図2)、ハナミズキは4枚(図3)、ベゴニアだって4枚、ユリやスイセンは6枚(図4)で、いくらでも5枚以外の花の名前をあげることができる。5がひそんでいるというのは思い過ぎではないの？



図1 オランダカイウ



図2 アヤメ

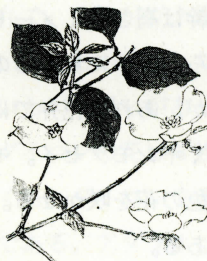


図3 ハナミズキ



図4 スイセン

(図1～図4 『植物の図鑑』 小学館より引用)

アジサイは4枚だ。庭に咲いていたガクアジサイを忘れたのか。それに香りのよい花として、春に咲くジンチョウゲや秋に咲くキンモクセイは4枚だ。どちらも小さい花をつけ、とても素敵な匂いがする。臭い匂いがするが、葉草としても使われるドクダミ、これは4枚の可憐な花をつける。

豪華なランの花は、5枚ではない。変形しているが、6枚だともみなせる。矢継ぎ早にでてくる女房の攻撃に、私は防戦の一方であった。そして彼女は、私の好きな花は4枚が結構多いと主張するのだ。

私は『植物の図鑑』で調べてみた。投げかけられた反論に答えなくてはならないからだ。

まず、1弁のカラーについて。

サトイモ科に属し、オランダカイウが花名で、カラーは別名。花の茎は高さ約1メートル。白い花びらのように見えるのは包(ほう)で、中の太い軸の表面に小さい花がつく、とある。カラーの包は仏焰苞(ぶつえんほう)ともいわれ、仏像に見られる後光や炎を見立てている。このようなタイプの花は、サトイモ科に属し、歌にある尾瀬のミズバショウや赤色のアンスリウム(ベニウチワ)などがある。

そうか、カラーは白い1枚の花を咲かせると思っていたが、あれは花卉ではなくて、包とよばれるものだったのか。1弁の花が否定されたので、ひとまず安心する。

つぎに、4弁の花についてだ。

春に咲くジンチョウゲ。ジンチョウゲ科に属し、幹は高さ約1メートルの常緑低木、皮に強い繊維がある。花に香りがあり、花びらのように見えるのは、ガク、とある。何、あれはガクなのか。確かに4枚であるが、あれは花卉ではなくてガク片なのか。鬼の首を取った気持ちである。秋に咲くキンモクセイ。モクセイ科に属し、キンモクセイは黄色の、ギンモクセイは白色の花を咲かせる。これも、ジンチョウゲと同じで、花びらに見えるのはガクである。

サクラに似たハナミズキ。ミズキ科に属し、幹は3~8メートルの落葉高木、花びらのように見えるのは包で、花は小さく中心にかたまつてつく、とある。

何、ハナミズキの花は花卉ではなく包なのか。それに、この包というものが、たしかに4枚あるが、4枚が均一でない。2枚が大きく、2枚が小さい。均一でバランスがよくて、包ではなく花卉が4枚の花はないのか、とケチをつける。

ドクダミ、これはよく知っている。忘れもしない臭い花だ。手ににおいがついたら石鹸でも取れない。昔、ドクダミ先生というタイトルの漫画があった。でも、私はドクダミ健康茶を愛用している。嫌われるが、役に立つというのがドクダミなのか。ドクダミはドクダミ科に属し、茎は高さ15~35センチで地下茎が長い。葉・茎は柔らかく、いやな臭いがある。花びらのように見えるのは総包(そうほう)で花にはガク片も花びらもない、とある。ドクダミの4枚は花卉ではないの

だ。

かなり面白くなってきた。自分に有利な説明ばかりに出合う。4弁については正統派に出合わなかった。

つぎに3弁のアヤメ。アヤメ科にはショウブやカキツバタがある。

花びらは6枚あるように見えるが、外側の3枚はガクにあたり、内側のたっている3枚が花びら。真ん中にめしべがあり、先が3枚にわかれている。3本のおしべはその下に隠れて見えない、とある。アヤメは複雑な形をしていて、私の要求する3弁の花ではない。

そして、6弁のユリ。花びらは6枚に見えるが、外側の3枚はガクにあたり、内側の3枚が花びらである。おしべも6本あるが、外側に3本、内側に3本あり、どれも3の数が基になっている、とある。ユリの花びらは6枚だと思っていたが、3枚が花卉で、3枚がガク片であったのか。これは知らなかった。

これで、当座しのぎをしたつもりである。私の頭の中には、どうしても5弁でまとめたいという思いがあった。他日のこと、バスの中で知人に花卉の話をする。すると、ダイコンの花は4枚ですな、畑に白い花が咲いていました、という答えが返ってくる。ダイコンやカブはアブラナ科に属し、白や黄色の花をつけ、いずれも4枚である。アブラナ(ナタネ)は代表的な4枚花である。

知人は、4つ葉のクローバーもありますね、と言う。でも、クローバーは3枚が標準で4枚は稀である。このことはいつか説明しよう。

周囲からいろいろ反論される中で、私の研究の前半である5弁が主流とする論拠は弱い気がした。さらに不運なことに、研究の後半である5弁の必然性についても、見通しがたたないことが判明した。それは、ウニやヒトデの時に用いた仮説のパターンが利かないということである。

私は、ヒトデの5本足を初期発生、卵割の32細胞期、準正32面体、サッカーボールという一連の流れで証明した。植物の場合は、卵割らしきものはあるが、ウニやヒトデのように卵割が進まず、8細胞期ごろで種子になってしまう。種子には花の形が入っていないのだ。このように私の研究には、暗雲がたちこめているのであった。

(大阪経済大学)